

10日にNY県人会30周年式典 大坪賢次会長に聞く

新潟の企業支援を重視



世界中から人が集まる大都市・米ニューヨーク(NY)市で、本県ゆかりの人たちが友好を深める場となってきたNY県人会。30周年記念式典を10日に控え、設立当初のメンバーでもある会長の大坪賢次さん(74)は、「作ることに続けることが大変だった。今後も県人の活躍を支えたい」と語る。大坪さんに故郷への思いや県人会の展望を聞いた。

(本社海外交流拠点NY事務所・横山志保)



「世界に挑戦する次の世代を支える」とは使命だと感じている」と話す大坪賢次さん(74)NYマンハッタン

おつぼ・けんじ 1944年、南魚沼市生まれ。日本大学卒業後、渡米。ワシントン大ロースクール卒業。85年大坪不動産を設立。2012年に在日モンテネグロ名誉領事。

故郷の人材育成へ思いはせ

「NYにいるときはいつでも背筋が伸びる。ここでは自分が新潟の代表だから、間違ったことはできない」と大坪さんは力を込める。

故郷の南魚沼市を離れて半世紀以上たち、NYの生活も30年を超える中、NYと新潟をつなぐ役割を果たしたいと考えてきた。県人会が中越地震の被災地支援の募金に取り組んだ際には、寄付をしてくれた人に個人的にお礼を返した。ふるさとへの思いがにじむ。

ただ、大学に進むため本県を離れた10代のころは、違う思いだった。「田舎はいやだな、というのが家を出たきっかけだった」と打ち明ける。

牛乳配達をして働きながら大学に通った。

大学を卒業後に渡米。不動産会社を興し、NYでビジネスを続けてきた。世界各国からビジネスを志す人や企業が集まるNYで、本県の知名度はまだ低い。「新潟の活性化や知名度向上のために何ができるのか。日本にいたころは思いもなかったが、今は考えずにはいられない」とふるさとへの愛着を語る。

「NYにいたころは、最近では県内企業の支援も重視する。特に期待を懸けるのは中小企業だ。NYは大消費地であると同時に、全米という大市场への拠点にもなる。「頑張れば、ここは夢をかなえられる場所だ。ぜひ、挑んでほしい」と強調する。

ほかの県人会では高齢化が目立つが、新潟のNY県人会は若い世代が多い。大坪さんはそうした次世代にも期待する。「先に出てきた私たちが、いまの若い人を支える。そして次は、彼らが次の世代を応援してほしい」

長岡市出身の妻とはよく、「新潟の子どもたちに米国を体験させたい」と話し合う。

NYだけでなく、首都ワシントンや学問の街ボストンなどを訪ねてもらえば、人材育成につながるという。世界に目を向けることのできる子どもたちを育てることが、故郷を発展させる一番の方法だ。NYから故郷の未来に思いを寄せた。